

■ 書 評



思量と願い 精神医学の風景

神庭重信 著
九州大学出版会
2019年1月 282頁
本体価格 2,400+税

明治 35 (1902) 年に創立された日本神経学会の機関誌として刊行された神経学雑誌 (現在の精神神経学誌) の発刊の辞 (第 1 巻 1 号) において、精神医学の使命が格調高い文章で説かれている。著者は呉秀三といわれている。

「或いは精神病と云い、或いは神経病と名くするも、等しく是れ神経器官の機能障礙にして、其候に多少の差異あるのみ。両者の間毫も劃然たる限界の存在を認めず、機能的神経病の如きにありて、特に其然るを見る。」「之を思わずして、徒に精神病を内科の圏外に放念して、全然神経病と区別せんとする如きは、抑も思わざるの甚だしきものと云ふべし。」科学的な精神医学を打ち立てようとする力強い見事なマニフェストである。精神疾患の病因を研究する際、生物学的基礎があることをしっかりふまえておくべきことを強調したもので、精神医学の基本となる方法が明示されている。

このたび神庭重信氏の著作を読ませていただき、図らずも神経学雑誌創刊の序の言葉が思い出され、精神医学の方法に一定の修正がなされる時代に入っている観を強くした。現代精神医学は遺伝子解析、脳画像など、高度な手法を駆使して種々の精神疾患の病因の解明に力を傾けてきたものの、少なくとも現在のところ、診断や病態把握にたる生物学的マーカーの特定に至っていない。この知見は、「遺伝子-言語」複合体としての人間総体を対象にする精神医学の構造的な両義性を指し示す。

実際、神庭氏はこの著作のまえがきで、率直に「精神医学の道を歩み始めた頃には、迂闊にも予見できなかったこと」の 1 つを次のように述べている。「研究対象とする精神疾患が、心理次元の動きや社会・文化の影響を強く受けて現れること、

すなわち生物医学 (物質世界) の問題と思える精神疾患の脳病態が、良い方向にも悪い方向にも、非物質世界からの影響を常に受けていることを、臨床の場で確信していった。」「脳は、生体内部で作動 (たとえば恒常性維持) するだけでなく、他の個体・集団あるいは社会や文化とインターフェイスをもち、自己と他者とを繋げることが出来る唯一の臓器なのである。」

たしかに精神疾患では、他者や社会との関係において不断に生成する「社会脳」こそ問題となるという見方が優勢になっている。『思量と願い』は人間の生物学的次元と心理・社会的次元の双方にバランスよく目配りしながら、今日のグローバルレベルの「精神医学の風景」と今後の展開につき幅広く深い思索を進めており、教えられるところが多い。

その 1 つは、精神医学が、また医学、科学一般が、霊性の次元を要請されているという視点が明確に打ち出されていることである。2 名の著名な科学者 (ヒューマン・ゲノム・プロジェクトのリーダー F コリンズ、オックスフォード大学数学者 J レノックス) がともに「科学が観測し解明できることに限界があり、神の存在証明は科学の外にあり、信仰と科学は両立できると主張する」と指摘したうえで、著者は「私も彼らのように科学とキリスト教とをそれぞれ信じていることができる」と明言している。科学や哲学的思索を真摯に突き詰めていくと、言語の限界点に直面し、霊性の覚知をせまられる出来事の到来は、新たな科学的言説が支配的になり、「神の後退」にますます拍車がかかっているといわれる今日においても、決して珍しいことではないことを教わる。

評者は、優れた意味での民主主義の精神を後ろ盾に卓越した手腕を発揮する日本の指導者のなかに、例えば医学界では日野原重明、秋元波留夫などのクリスチャン、特にプロテスタントの学者が少なくないことに興味をもっている。現在、日本精神神経学会理事長として学会を力強く牽引している神庭氏もその 1 人であると思う。高度な専門的技術者になることを課される 21 世紀の医学徒は、患者の治療にあたる以上、科学だけでなく哲学や芸術、宗教に開かれた重層的な知を磨くことを促されている。その点でも本書は啓発的である。

(加藤 敏)